

とで初めて持続的・自立的となる。そこにつながる開発援助のためには、対象地域住民の行動を律する仕組みについて深い理解が必要である。この論理に立って、研究者自らが研究と開発実践をつなごうとした本書の試みは高く評価できる。

しかし本書はそうした仕組みの解明にどこまで成功したのだろうか。持続的開発の実現、すなわち筆者等のいう「内在化」が本当にできたのか、あるいはどうすればできるのかは示されていない。地域社会の仕組みは「焦点特性」を通して把握されるようだが、本書で示された2つの焦点特性は、概念のカテゴリーがそれぞれ違っていて、なぜそうした焦点特性が導き出されるのか、調査をおこなった当事者以外にはわからない。焦点特性は、筆者等のように対象地域を徹底的に調べた人にしかみえてこないのであろう。

こういう焦点特性の把握方法に依拠した開発援助は、面的な広がりをもち得ない。NGOが途上国のいろいろな村ですばらしい実践をしているけれども、いつまで経ってもそれらが「成功事例」に留まるのと同じである。研究者が実践に関わるなどという方法も、めったにできることではない。

いま研究者に求められているのは、地域社会の仕組みをどう把握するのか、開発実践に携わろうとする人なら誰にでもわかる仕方で示すことである。ごく普通の地方行政官、地域リーダー、フィールドワーカーが、自分の担当する地域の「焦点特性」をつかむ方法を示すことである。

佐川 徹、『暴力と歓待の民族誌—東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』昭和堂、2011年、437 p.

曾我 亨*

待望の書物が刊行された。佐川による『暴力と歓待の民族誌』である。佐川のすばらしい学会発表を聞いた者は、誰もがその全貌をまとまった形で読みたいと待ち望んでいたに違いない。本書は2009年に京都大学に提出された博士論文をもとに書かれている。この鮮烈な書物を、世界中の学者に先駆けて日本語で読めるとは、なんと幸運なことだろう。

以下、本書の内容を示し、論評していこう。本書はエチオピアの深南西部にくらす牧畜民ダサネッチを対象としている。好戦的とされる牧畜社会の戦争と平和を真正面から取り上げている。本書の構成は次のとおりである。

第1章 序論

第2章 ダサネッチの概要

第3章 国家と集団間関係

第4章 戦争経験と自己決定

第5章 横断的紐帯と境界

第6章 外部介入と平和維持

第7章 結論

第1章においては、戦争と平和をめぐる本書の立ち位置について説明されている。まず、戦争と平和に関する従来の人類学的研究の多くが、人間の本性を好戦性にもとめるホップズ人間観と、平和性にもとめるル

* 弘前大学人文学部

ソー的人間観のいずれかに依っていることが示される。しかし佐川は、戦争と平和を対立的にあつかうやり方に終止符を打つ。好戦性と平和性を相互に作用し合う連続的な過程と捉え、友好的な相互作用のなかに敵対関係に至る端緒を、逆に敵対関係のなかに友好的な関係に至る端緒を見出そうというのが本書の立場なのである。

そのうえで佐川は3つの研究課題を設定する。ひとつは、個人を分析の中心にすえることである。先行研究のなかには、戦争の役割を、集団の自律性を維持させるためとするものもある。しかし戦争もまた、人々の意思決定や行為選択の複雑な相互作用をとおして遂行されている。佐川は、戦争におもむく個人の経験に焦点を当て、その経験が次の戦争に際して個々人の選択にいかなる影響を与えているのかを明らかにしようとする。2つ目の課題は、個人を分析の中心にすえることで、戦争が発生していく過程と、そこから平和が回復されていく過程を明らかにすることである。個人的な契機から発生する暴力がいかに発現し、いかに消散するのか。集団の境界概念に注意をはらいながら解明していく。3つ目の課題は、平和構築を目指す外部からの介入の人類学的評価である。好戦的とされる牧畜社会には、近年、国家やNPOなどが平和構築のための介入を強めている。戦争状態から平和を回復させる牧畜社会のやり方と対比しながら、外部からの介入の特徴を明らかにする。

第2章にはダサネッチの概要として、生業様式、社会・政治構造、ライフサイクル、

ジェンダー、近隣集団との関係がまとめられている。

第3章では国家と集団間の関係について、歴史的に再構成されている。この章ではとくに、東アフリカの牧畜社会にひろく張りめぐらされた交易ネットワークを念頭に、銃がどのように拡散していったかに注意している。銃は牧畜社会に不均質に拡散していったが、入手できる銃の性能と数の違いによって、諸民族の間に軍事的階層がつくりだされていった。さらに自動小銃が登場すると、牧畜民は「カラシニコフに酔っ」たかのように暴力にとりつかれていった。とはいえ佐川は、銃の流入によって紛争が激化してはいるものの、敵の殲滅を目指した全面戦争とはなっていないこと、さらに今なお、近隣民族との間には個人的な友好関係が存在していることを指摘している。

第4章と第5章は本書の中核であり、個人に焦点を当てた分析が展開される。まず第4章では、戦争のやり方、人々を戦争へと動員する文化装置、敵の表象のされ方などが述べられた後、戦争参加への自己決定について記されている。佐川は174名の男性に対して詳細なインタビュー調査をおこなった。そして戦争に参加した回数には、人によって大きなばらつきがあることを見い出した。そしてこのばらつきが年齢組織や社会的地位などの違いによって生み出されるのではないこと、またほぼ全ての男性が、少なくとも一度は戦争に行った後、ある時期から戦争へ行かなくなることを明らかにした。

なぜ彼らはある時期から戦争に行かなくな

るのだろうか。それには過去の戦争体験が強く影響している。ダサネッチは戦場では一丸となって闘うことを理想とする。ところが実際には、傷ついた仲間を見捨てて逃げたり、略奪した家畜をめぐる争いあったりすることも少なくない。こうした経験が、彼らに戦争を忌避させるようになるのである。

ダサネッチは東アフリカの他の牧畜社会と同様、「個人主義的」な人間観を有しており、ある者が戦争に行かないと決定しても、周囲の者はその決定をただ受け入れるだけだという。戦争に行かないからといって、社会から排除されたり憶病者とののしられたりすることはない。しかし同様に、戦争に行く者を止めることもできない。ダサネッチにおいて戦争は、個人的な自己決定の集積によって発動するのであり、集団が個人を強制的に動員しているのではないのである。

第5章ではダサネッチと近隣民族との流動的な関係について分析している。ダサネッチは近隣民族との間で、家畜を贈ったり、歓待したり、相互に往来することで個人的な友人関係を結んでいる。こうした友人関係は、長年戦いを重ねてきた「敵」との間につくられることが多いという。集団の境界付近に広がる放牧地での出会いが友人関係の端緒となるのである。一方で、ともに生活するとトラブルは避けられない。関係が悪化するにつれて人々はたがいに自らの土地へと引き上げていく。緊張が高まると儀礼や呪詛がおこなわれる。かくして「敵」と「われわれ」の境界が形成されていくのである。

さて、戦争が一段落すると、今度は平和儀

礼をおこなうために、人々の往来が復活する。最初に敵地をおとずれるのは、「敵」との親密な個人関係を有する者である。やがて人々は相互に訪問し合い、友人関係を結んでいく。ダサネッチと近隣民族においては、戦争と平和が振り子のように動的に現れる。戦争は平和のなかから生まれ、平和は戦争のなかから生まれる。本書の主張する、戦争と平和の分かちがたい関係が鮮やかに示される。

第6章では、平和構築にむけた外部からの介入についてまとめられている。佐川は、紛争を恒久的に解決しようとするのではなく、紛争を平和に転換し、その状態を持続的に維持し続ける方法を模索する。ダサネッチが平和儀礼で強調するように、彼らは近隣民族とともに共存してきた。それは紛争の原因にもなったが、平和に向かうときの原動力にもなっていた。近年、エチオピアでは、民族ごとに行政区を定めた結果、かえって諸民族の対立や紛争が増えつつある。佐川はこうした政治状況において、民族集団を空間的に分離するのではなく、諸民族の個人的な相互往来を前提にした介入の重要性を指摘している。

第7章では、各章の議論をまとめている。自動小銃が拡散して以来、東アフリカの牧畜社会は無秩序化しているかのように語られる。しかし佐川はダサネッチの人々の秩序維持の営みを強調し、そのローカルなポテンシャルを引き出すことの重要性を指摘している。

以上、駆足で内容を紹介してきた。本書は充実した民族誌的データに基づいて議論が進められており、非常に読み応えがある。たと

えば第2章は単にダサネッチの概要を示すだけの章であるはずだが、近隣民族について描かれた民族誌的データと佐川が集めたデータとが綿密に突き合わされ、ダサネッチの特徴が鮮やかに示される。さらに佐川の綿密な作業をみると、逆に他の民族誌家のデータや解釈が疑わしく思えてくるほどである。東アフリカの牧畜社会を研究する者にとって、本書は比較民族誌的記述の新たな基準となるだろう。

次に特筆すべきは、個人を分析単位にすえつつ戦争という集合的实践を扱ったことである。ミクロ人類学を提唱する田中雅一[2006]は、従来的人类学が鳥瞰的な高みに立った全体論を指向してきたことを批判し、高みに上がるという誘惑を拒否する。あえて「虫瞰的」な立ち位置をとることで、人々の抵抗や想像力、身体や感情を明らかにし、これらを起点に世界観や国家などのマクロな領域を問い返すというのである。確かに全体論的な見方を破棄することで、ミクロ人類学は大きな可能性を手に入れた。しかしその一方で、ミクロ人類学は国家や集団が主体となっておこなう政治的決定や組織的实践を研究对象から外すことで、それを特権化してしまったともいえないだろうか。国家やグローバリゼーションを生きる個人の抵抗を描くことはできるが、その個人はあまりに「無力」で、かえって国家やグローバルな力の強靱さが意識されてしまうのである。これに対して佐川は、戦争や平和という集合的实践が、個々人の意思決定の蓄積と相互交渉によって生成することを明らかにした。ミクロな分析を徹底

することで、マクロな領域との動的な関係を描き出せたことが本書の魅力的な点である。

さらに付け加えるならば、本書は個人に注目することにより、平和から戦争が生み出され、戦争から平和が生み出される過程を描き出すことに成功した。リーチ[1987]の『高地ビルマの政治体系』は、2つの政治形態の動的な関係を明らかにしたとして高い評価を得ているが、実のところ、ヒエラルキカルな政治形態と平等的な政治形態がどのように転換していくのか、具体的に解明したわけではない。本書は、リーチの古典的名作が提起した課題に、現代的な解答を示したともいえるだろう。

ただし、こうして導き出された結論が、東アフリカの牧畜社会全体にどれほど適用可能であるかは慎重に検討すべきだろう。もっともこれは佐川の課題というよりは、この挑戦的な本書を手にした我々の課題というべきである。本書においても指摘されているように、近年、牧畜社会は政治化を強め、エスノ・ナショナリズムが勃興しつつある。従来の家畜をめぐる紛争に代わって、他民族への嫌がらせを目的とした低強度の、しかし持続的な紛争がおこなわれるようになってきた。これは自民族中心主義的なアイデンティティ・ポリティックスにかかわる目標を達成するための紛争であり、カルドー[2003]がよぶ「新しい戦争」の特徴を備えている。こうした状況にあっても、個人を分析の中心にすえて戦争を記述できるのか、あるいは逆にこうした戦争を記述する際に、個人のどのような行動に注目すれば良いのか、我々は考

える必要がある。

また佐川は、第6章で外部からの介入について考察しているが、ここで取り上げられた介入の事例は、いずれも家畜をめぐる紛争を対象としている。基本的にこれらの紛争は、家畜を奪ってしまえば収束に向かうような単発型の紛争といえる。これに対し「新しい戦争」では、相手に恐怖を与え続けることに目的がおかれ、小規模の殺人が連続する持続型の紛争である。今後は、こうした紛争への介入が中心となってくるだろう。そのとき佐川のいうように、組織や法に還元されない個人的な関係を平和維持の基盤にすることが可能なのだろうか。我々は、佐川の主張を繰り返して吟味しつつ、「新しい戦争」を克服する（あるいは「新しい戦争」とも折りあえる）ローカルなポテンシャルを探していかなければならないだろう。

本書は、牧畜社会の戦争と平和の動的な関係を題材に、紛争転換の方向性を示している。紛争への対処という現代的な課題に対して、人類学的な解答を示す野心的な研究となっている。また、その内容は牧畜社会に限定したものであるが、世界中で起きている紛争についても考えさせられる内容となっている。本書が一日もはやく外国語に翻訳され、世界中の研究者に読まれることを期待したい。

引用文献

カルドー、メアリー。2003 [1999]。『新戦争論—グローバル時代の組織的暴力』山本武彦・渡部正樹訳、岩波書店。

リーチ、R. エドモンド。1987 [1954]。『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳、弘文堂。

田中雅一。2006。「序論 ミクロ人類学の課題」
田中雅一・松田素二共編『ミクロ人類学の実践 エージェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社、1-37。

小川さやか。『都市を生きぬくための狡知—タンザニアの零細商人マチングの民族誌』世界思想社、2011年、398 p.

平野（野元）美佐*

本書は、タンザニア第2の人口規模をもつムワンザ市における、「マチング」と呼ばれる零細商人、とくに古着商人の世界を詳細に記述・分析した第一級の民族誌である。

著者は、自ら古着を行商し、市場に露店を開き、小売商たちに古着を卸す中間卸売商を経験してきた。このミクロな「実践観察」と多数の商人への聞き取りを中心に得られたデータから構成された本書は、マチングの世界を臨場感と説得力をもって描き出している。

本書は、序論部、古着商人の商実践を詳述し分析した第I部、マチングが誕生してから今日までの商慣行の変遷を追った第II部、マチングをとりまく路上空間を分析した第III部、そして結論部からなる。

序論部は、序章「マチングと都市を生きぬくための狡知」、第1章「ムワンザ市の古着商人と調査方法」、第2章「マチングの商世

* 天理大学国際学部